ケーススタディ

日本社会事業大学　社大福祉フォーラム運営委員会及び企画委員会

代表執筆者　学部２年　下　鳥　　葵
企画担当　編入４年　前　田　　南・学部３年　荒　川　和　紀
学部３年　石　川　　晶・学部３年　樋　沢　幸　大
学部２年　高　橋　夏　海・学部２年　堀　内　亨　樹
学部１年　福　田　寛　和・学部１年　湯　沢　喬　宏
学部１年　横　田　拓　音

はじめに

日本社会事業大学社大福祉フォーラム運営委員会及び企画委員会 (以下　学生委員会) は、2014年学内学会より発足した。発足の目的は、日本社会事業大学の学部生の目線に立って自主企画を運営するほか、学内学会全体の運営実務にかかわることである。学生委員会は学生による学生のための自主企画をもって、本学学生の社大福祉フォーラムへの参加を促し、学生が普段より研究していることや思考試作していることを発表する場を作ることを目指している。

学生委員会は、本学学生が将来福祉専門職として活躍できるためには何が必要かという議論を繰り返してきた。その中で比重の大きかった意見が二つある。一つ目は、本学は単科大学のため、他大学と比較しても人とのかかわりが狭くなりがちであること。二つ目は、普段の講義を受けるだけでは、自分が福祉職として働くビジョンが見えにくいということであった。将来の実践のためにも多くの意見に触れ、学びを深め、そのビジョンを描きたいという思いが私たち委員に強くあった。そうして発案されたのが本企画、「ケーススタディ」である。

本稿では、社大福祉フォーラム 2016 の一日目において実施された学生委員会主催の自主企画「ケーススタディ」について報告する。

1. 企画の目的

目的は主に二つあった。一つは、企画者含め参加者がそれぞれの考えを言葉にし、意見交流ができる場を提供することである。もう一つは、福祉分野を学ぶ学部生と実際に福祉の現場に出ている先輩が意見交流し、理想と現実のギャップを知ることである。

さて、大学などの高等教育機関における福祉教育には、二種類のタイプがある。一種類目は、福祉について広範な知識と福祉的観点を身に着け社会生活上で役立てるための教育である。二種類目は、ただ広いだけでなく、深い知識と技術を身に着け福祉専門職として活躍する人材を育てるための教育がある。日本社会事業大学は二種類目にあたり、在学する学生は福祉専門職としての知識や技術の習得に励んでいる。しかし、普段の講義をどんなに真剣に聞いても実際の福祉の現場のことをリアルに捉えるのは難しい。

よってこの企画では、実際の福祉の現場で働かれているゲストの方との交流を通して、学生自身が気づきを得ることを目指す。

今回はケーススタディの事例テーマを統一し、支援対象別に子ども、障がいと分野を分けてケーススタディを行った。どちらか選んだ事例について参加学生が考えたことを、ほかの参加者と共有し深めていく。福祉分野を学ぶ学部生と実際に福祉の現場に出ている先輩が意見交流し、理想と現実のギャップを知ってもらおうと企画担当委員は

考えた。

2. 実施概要

本企画は2016年6月25日の13時から15時、社大福祉フォーラム2016の自主企画内で行われた。場所は日本社会事業大学清瀬キャンパスのC303を使用した。

今回は、取り扱う二つの事例について、一教室を半分に分けて実施した。一グループ5~6人の小グループを作り、簡単な自己紹介を経て事例の検討に移った。具体的には以下の流れで交流を行った。

1. 進め方の説明(15分)
2. 自己紹介(10分)
3. 事例の説明(15分)
4. 個人での検討(15分)
5. グループでの検討(40分)
6. 全体での共有(15分)
7. まとめ(10分)

各分野の事例の説明は、企画担当から一グループに一人配属していたファシリテーターが、配布資料と口頭で説明を行った。文末に当日の配布資料を添付したのでご参照いただきたい。(参考資料1~2) まず、各個人で自分の意見をまとめたのち、小グループで意見を深めた。最後には同じ分野のグループ全体で議論の内容を共有した。そして、参加者から感想を発表してもらい、プログラムを終了した。

3. 招待したゲストスピーカーについて

今回は4名の方をゲストスピーカーとして招待した。子ども分野と障害分野に二人ずつである。障害分野には、長野僚氏、佐藤衣果氏の二名。子ども分野には、氏家真純氏、清水歩氏の二名である。佐藤氏、氏家氏、清水氏は3名とも2009年度の学部卒業生である。長野氏は居宅介護事業所「ビーサイドユー」に入社後、日本社会事業大学通信教育課程で社会福祉士の資格を取得され、2016年春から「ビーサイドユー」スタッフとともに「特定非営利活動法人さざんか」を立ち上げ、現在はノーマライゼーションの推進や、障害分野に関する研修などを実施されている。佐藤氏は本学卒業後、特別養護老人ホームや認知症対応型共同生活介護(グループホーム)などの高齢者分野の職に勤務後、障害者福祉分野で活躍されている。氏家氏は本学卒業後から、社会福祉法人厚生福祉会に所属され、また、保育士として「かつしか風の子保育園」(社会福祉法人厚生福祉会運営)に勤務されている。清水氏は本学CSW過程を卒業された後、市役所に就職し、公立保育所にて保育士として勤務されている。

4. 当日の様子

(1) 障害分野の当日の様子

3グループに分かれて話し合いが進められた。プログラム参加者は18人。学部1年生が6人、学部2年生が6人、ファシリテーターが3人、ゲストスピーカーが2人、ゲストスピーカーではないが実践現場に出ている当日参加者が1人である。

まず、今回取り扱った事例は、避難所で暮らすAさんについてである。(参考資料1) 地震による津波で自宅が全壊。避難所のまんなかで車いす生活を送っていて、二週間車いすから降りられないという困りごとや、トイレに行くときに通路の人を起こさなければならないという困りごとがAさんにはある。ケーススタディ参加者は、同じ避難所で暮らす人間と立場を決め、Aさんにどのように関わっていくのか、どのように支援するのか考えた。

あるグループでは、Aさんにどのように関わっていくのか、どのように支援するのかを考える際に、「Aさんはなぜベッドに乗らないのか」という観点から論議を深めていた。ベッドに乗れない理由をAさんの精神面、身体面の両方の視点から眺めていた。精神面では「罪悪感を持つのではないか」「周りの目が気になるのではないか」などと話され、身体面では「車いすからベッドへの移動が困難なのではないか」「次にトイレに行くときも大変になってしまう」などと話されていた。

これらの面から、A さんは困難をいうことができず、精神的ストレスが生まれているという考えにいたったグループがあった。このグループは最終的に、「周囲の人の協力を得ること」を「A さんにどのように関わっていくのか、どのように支援するのか」という問いの答えにしていた。具体的に、周囲の人の協力を得ることとはどういうことかというと、悩みを話せる人を作ること、A さんだけでなく家族への総合支援をすること、避難所の人たちとコミュニケーションを取ることで A さんのことをよく知ってもらうこと、トイレに近いところに A さんを移動させること、などの意見が上がった。

(2) 子ども分野の当日の様子

2 グループに分かれて話し合いが進められた。プログラム参加者は 11 人。学部 1 年生が 6 人、学部 2 年生が 3 人、ゲストスピーカーが 2 人である。

まず、今回取り扱った事例は、震災で親を亡くした中学二年生の A ちゃんの支援である。元気に振る舞う A ちゃんだが、PTSD の症状がある。(参考資料 2) ケーススタディ参加者は、もし自分の立場が A ちゃんが通う学校のスクールソーシャルワーカーなら、どんな支援ができるのかを考えた。あるグループでは、「安心」「信頼」「理解」というキーワードが多く聞かれた。一方で、他のグループではエコマップに支援方法をまとめるなど、それぞれ見ごたえのある発表であった。大きく分けると子ども分野では「安心できる場所作り」と「周囲の理解を得るきっかけを作ること」が A ちゃんが通う学校のスクールソーシャルワーカーなら、どんな支援ができるのかという問いの答えであった。

5. アンケート結果

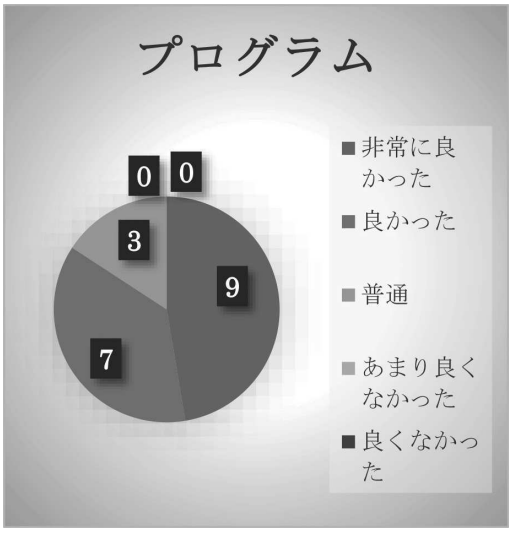
(1) 集計結果

プログラムの最後に、本企画の目的である「企画者含め参加者がそれぞれの考えを言葉にし、意見交流ができる場を提供すること」「福祉分野を学ぶ学部生と実際に福祉の現場に出ている先輩が意見交流し、理想と現実のギャップを知ること」が達成できたかどうかを調査するため、参加者にアンケート用紙の記入をお願いした。

以下はその結果である。なお、単位はすべて「人」とする。

Q. 本日のプログラムはいかがでしたか？

非常に良かった：9
良かった：7
普通：3
あまりよくなかった：0
よくなかった：0



・良かった点：
当事者の話を聞けた 4
意見の共有ができた　3
現場での話を聞けた　2
自分が参加できる 1
みんながワークに参加していた 1
時間配分 1
初めてのケーススタディだったので楽しめた 1
先輩と交流できた 1
・良くなかった点：
反論が少ない 2
設定がアバウトだった 1
時間が短かった 1

Q. あらゆる場面での非常時の対応について、今のあなたの考えをお聞かせください。

①あなたは普段、非常時の対策として実行していることはありますか？

特に何もしていない：15 人

している：4 人

・具体的な対策：

防災グッズ　2

水、食料など生命維持のための備え　2

非常口の確認　1

②あなたが現場で働く福祉従業者だとしたら、非常時の備えは必要だと思いますか？

特に必要だと思わない：2 人

必要だと思う：16 人

無記入：1 人

・どのような備えが必要だと考えるか：

食料、水分　6

避難ルート、場所の確認　3

被災時のための SW、相談員の確保　2

クライエントの特性に合わせた対策　1

非常時に大切なものは何か考えておくこと　1

正しい知識を得る　1

車いす　1

人工内耳の電池　1

③あなたが現場で働く福祉従業者だとしたら、非常時の対応について行政機関にどのようなことを期待しますか。

正確な情報伝達　3

パーソナルスペースの確保　3

物資の早急な提供　3

全員への情報伝達　1

安否確認の体制の整備、その周知 1

障がい者、老人、子供への配慮　1

SW の効率的な派遣　1

ボランティア教育　1

Q. ケーススタディを通した感想についてお聞かせください。

①本日のプログラムの内容の難易度についてお聞かせ下さい。

難しかった：6

やや難しかった：6

普通：3

やや易しかった：0

易しかった：1

無記入：3

②本日のプログラムにおいて、あなたに一番影響を与えた人・ものは何ですか？

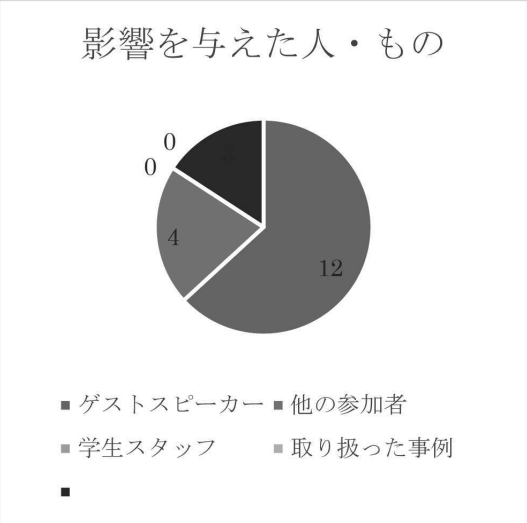
ゲストの方：12 人

他の参加者：4 人

学生スタッフ：0 人

取り扱った事例 :0 人

無記入：3 人



・印象的なエピソードを教えてください。

当事者の体験　4

学生の運営がよかった　3

③本日のプログラムを終えて、今後に活かしたいと感じたことはありますか。

勉強　3

当事者の気持ちを考慮すること　3

被災時に自分にできること　1

自分にない視点　1
コミュニケーションの大切さ　1
事例検討の進め方　1

(2) 考察

ケーススタディを通した感想のアンケート欄にて、「本日のプログラムにおいて、あなたに一番影響を与えた人・ものは何ですか？」という問いがある。グラフを見てみると、過半数以上が「ゲストの方」という回答をしているということが分かった。また、ゲストスピーカーと話し、本学学生は災害時の非常時の対応を具体的に思い描けるようになっていることも、様々な対応が挙げられたアンケート結果からもわかる。この結果から、企画者含め参加者がそれぞれの考えを言葉にし、意見交流ができる場を提供することができたと考えられる。なにより、福祉分野を学ぶ学部生と実際に福祉の現場に出ている先輩が意見交流し、理想と現実のギャップを知ることができたであろう。

6. 総括

今回このような現場で活動されているゲストの方と交流できる機会によって、学生は自分自身のイメージと現場のギャップを実感することができたと私は考える。また、考えを言葉にすることで、参加者一人ひとりが自分の持っていた現場のイメージを知ることができたであろう。そして、そのビジョンを参加者と意見を交換し合い、それぞれが新たな視点や価値観を得ることができた。また、ご協力いただいたゲストの方々にも「今の学生が考えていることが知れて新鮮であった」という肯定的な感想をいただいた。

最後に、今回の交流及びケーススタディの企画を通して、学生が自分たちの力で学習の場を作り、新たな気づきを得ることの重要さを学んだ。今後も自発的な学習のための機会つくりに努めていきたい。なぜなら、重要だと気付いたことを「継続」させることが今後の学習の発展につながるからである。

参考資料１

学内学会　災害事例検討　障害者分野

～避難所で生活しているAさんのケース～

氏名：Aさん
性別：女性
年齢：４２

家庭状況：母親は高齢で足が悪いが、障害者手帳はもっていない。

性格特性：温和で真面目な性格である。

ADL：HTLVー１関連脊椎症による下肢障害。移動は、車椅子を使用。食事は自立。排泄はユニバーサルトイレであれば自分でできる。入浴は介助が必要である。

被災状況：地震による津波により、自宅は全壊。最寄りの避難所に避難している。

事例：HTLVー１関連脊椎症による下肢障害があるAさんは、避難所で２週間車椅子の上で過ごしており、ほとんど寝られていない。Aさんのスペースは避難所の真ん中のため、トイレに行くのが不便であまり水分を取らないようにしている。難病の薬も切れており、病状も悪化している。震災の影響でヘルパーは不足しており、Aさん一人につきっきりになることは難しくAさんの病状の悪化には気づけなかった。また周りの人も病状の悪化に気づかず、巡回の医師が異変に気付いた。Aさんを受け入れてくれる避難先を探しているが、Aさんの母親も一緒ということを伝えると、受け入れ先はすべて辞退してしまった。Aさんは下肢が動かず、避難所の床に寝ることはできない。Aさんの生活状況の改善のためにベッドを用意したが、Aさんは乗ろうとしない。Aさんは「今こんなことを言うのは不謹慎かもしれないけど、２週間も車椅子の上にいるので疲れている」と言う。さて、あなたは同じ避難所にいる人として**Aさんにどのように接すればよいか、また、どのような支援が考えられるか。**

用語解説：
・HTLVー１関連脊椎症・・・HTLV-1関連脊髄症（HTLV-1 associated myelopathy）とは、発症する原因はまだはっきりとはわかっていないが、HTLV-1に感染したTリンパ球が脊髄の中に入り込み、炎症を起こすことがきっかけと考えられている。脊髄の中で起こった炎症が慢性的に続くことで、神経細胞が傷つけられる。脊髄には両足、腰、膀胱、直腸などへつながる神経が通っているため、足が動かなくなったり排尿障害、便秘などの症状が現れる。現在、全国で約3,000人の患者がいると推定されている。平成21年度より、厚生労働省難病対策疾患に指定された。（参考：HTLVー１情報サービス）

・ADL（Activities of Daily Living）・・・日常生活動作。日常生活を営む上で、普通におこなっている行為、行動のこと。具体的には、食事や排泄、整容、移動、入浴等の基本的な行動をさす。リハビリテーションや介護の世界で一般的に使われている用語の一つで、要介護高齢者や障害者等が、どの程度自立的な生活が可能かを評価する指標としても使われる。（介護応援ネットHPより）

参考映像・URL
・「逃げ遅れる人々 東日本大震災と障害者」（2014, 飯田 基晴,東北関東大震災障害者救援本部）
・http://htlv1joho.org/general/general_htlv1.html
・http://kaigoouen.net/knowledge/care/care_1.html

学内学会　災害事例検討　障害者分野

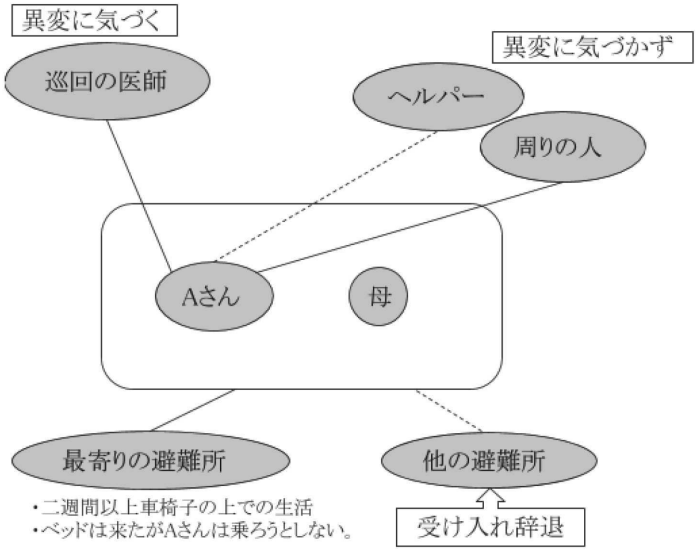
～避難所で生活しているAさんのケース～

【Aさんの事例について、避難所にいる人間の立場から皆さんに考えて頂きたい事】

質問１　　Aさんはなぜベッドに乗らないのか？

質問２　　Aさんはどのような困難を抱えているのか？

最終目標　<u>Aさんの生活状況をいかに良くしていくか？</u>



参考資料２

学内学会　　災害事例検討　　子ども分野

～震災で親を亡くした子どもの支援～

氏名：Ａちゃん
性別：女性
年齢：14歳（中学2年生）

家庭状況：叔父、叔母、息子、Ａちゃん
叔父叔母ともに会社勤めで、叔父は毎日遅くまで仕事をしている。高校２年生の息子も　　運動部に所属している為、平日はそれぞれが忙しく過ごしている。しかし、休日には家　　族揃って食事にでかけるなど家族関係は良好である。

性格特性：リーダー気質、周囲に弱みを見せない

被災状況：地震により両親を亡くした。自宅兼店舗は全壊。
Ａちゃんが通う中学校には同じような境遇の子が多くいる。

事例：Ａちゃんは、現在中学２年生。小学5年生の時に起こった大地震で両親を亡くした。両親は自宅近くの店舗で飲食店を営んでおり、そこで２人とも被災した。Ａちゃんは学校に行っていたため助かった。兄弟はいない。
近くに住む叔母がすぐに連絡をくれ、親身になって面倒を看てくれた。そのまま妹家族の家に引き取られ、叔母と叔父とその息子（高校２年生）の４人で生活をしている。小学校はこれまでと同じ学校に通い、中学からは近くの公立学校に通っている。
Ａちゃんは小さい頃から聞き分けが良くしっかりしている性格で、学校ではリーダー的存在であった。震災後の学校生活でもそれは変わらず、決して周囲に悲しんでる姿などを見せなかった。家では叔母家族がとても親切にしてくれよほく声を掛けてくれるが、Ａちゃんはいつも「悩みは無いよ。毎日楽しいよ。」と叔母たちに心配をかけまいとしている様子。
ある時親友のＢちゃんと二人でいると、Ｂちゃんが震災の話題を出した。それを聞いたＡちゃんは急に泣き出し動機や過呼吸を起こした。しかしすぐに落ち着きいつも通りのＡちゃんに戻った。
Ｂちゃんは、Ａちゃんの様子が変だったので心配になりこのことを担任に相談してみることにした。
担任は、それはＡちゃんが辛い経験を乗り越えた強さではなく現実と向き合えず逃げてしまっている弱さと考えた。また、震災で両親を失った経験がトラウマになり、PTSDの症状が出たのだと考えた。しかし、とても繊細な問題で簡単に向き合えと言うことはできない。中学校の面接習慣を利用し、震災から３年経った今Ａちゃんはどのような思いでいるのか、聞いてみることにした。

担任：「学校生活で何か困っていることは無い？」
Ａちゃん：「うーん、特にないですよ。楽しくやっているので大丈夫です。」
担任：「そっか。小さなことでもいいし、気になることがあればいつでも聞くからね。」
Ａちゃん：「はい。ありがとうございます。」
担任：「学校のこと以外で何か困っていることはある？」「家のこととか、何でもいいよ。」
Ａちゃん：「家・・・。（表情を曇らせる）そうですね。特にありません。大丈夫です。」
時折笑顔を見せながら元気に答えるＡちゃんだったが、どこか空元気で無理に笑っているようだった。
そこで担任は、自分だけではＡちゃんの対応は難しいと判断し、週に数回非常勤で学校に来ているスクールソーシャルワーカーに相談することにした。

学内学会　　災害事例検討　　子ども分野

～震災で親を亡くした子どもの支援～

用語解説：
・PTSD・・・大きな災害などでとても怖い思いをした記憶が心の傷となって何度も思い出され、恐怖を感じ続ける病気です。突然「物音に敏感になったり、イライラしたりする」、「災害のことを思い出して突然おびえたり混乱したりする」といった症状が見られます。心の傷に気づかないまま、２０年、３０年経って
から症状が出て周囲の理解が得られず深刻な事態になるケースもあります。

・スクールソーシャルワーカー・・・
児童・生徒が学校や日常生活で直面する苦しみや悩みについて、児童・生徒の社会環境を構成する家族や、友人、学校、地域に働きかけ、福祉的なアプローチによって解決を支援する専門職。SSWと略す。社会福祉士や精神保健福祉士などが就くことが多いが、専門資格はなく、教職や福祉の経験者がなる場合もある。配置型と派遣型があり、配置型は配属された学校の職員として勤務する。もう一方の派遣型は、市町村などの教育委員会を窓口として、依頼のあった学校に派遣されて活動し、複数の学校や生徒の問題を担当することもある。

【Aちゃんの事例で皆さんに考えて頂きたい事】
もしあなたがAちゃんが通う学校のスクールソーシャルワーカーだとしたら、どのような支援ができると思いますか。

①Aちゃん自身が自分自身の問題に向き合う為にできることは何でしょうか。

②PTSDを抱えるAちゃんが、生きやすくなる為にできることは何でしょうか。

【①②を考える上でのポイント】
・Aちゃんの本心は？

・Aちゃんのストレングス（強み）は？

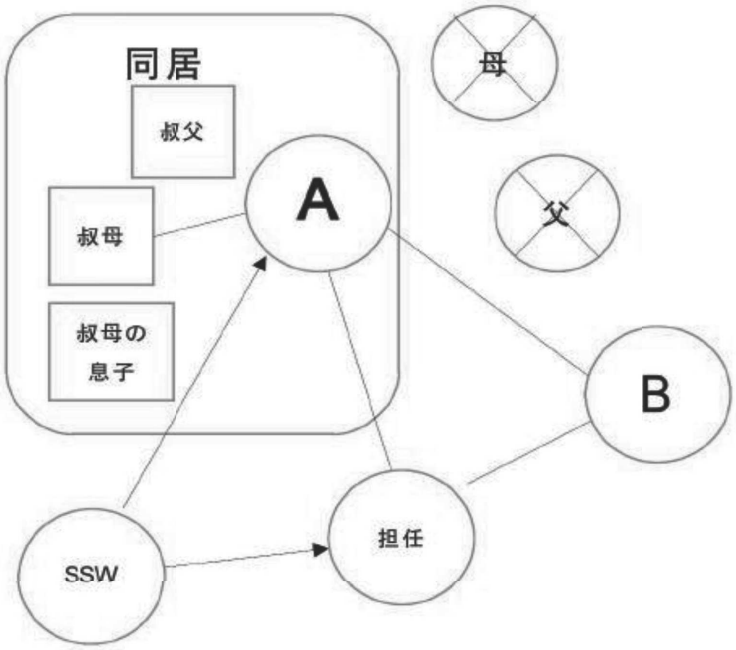
・Aちゃんが安心できる場所はどこ？

参考文献：
・NHK解説委員室HP「熊本地震子供の心のケアは（時論公論）

学内学会　　災害事例検討　　子ども分野

～震災で親を亡くした子どもの支援～

http://www.nhk.or.jp/kaisersu-blog/100/242816.html 閲覧日2016/05/13

・コトバンクHP「スクールソーシャルワーカー」日本大百科全書（ニッポニカ）
https://kotobank.jp/word/%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%82%BD%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%AB%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%AB%E3%83%BC-886624 閲覧日2016/05/13

エコマップ：